

地域子育て支援拠点研修事業



みんなで創ろう地域子育て支援拠点

兵庫
開催

～協働で描く兵庫の子育て未来プラン～

開催概要

開催日／平成 21 年 12 月 13 日（日） 9:45～16:30

会場／ホテルニューアルカイク 2 階（兵庫県尼崎市昭和通 2-7-1）

尼崎市総合文化センター7・8 階 （兵庫県尼崎市昭和通 2-7-16）

主催／財団法人こども未来財団・NPO 法人子育てひろば全国連絡協議会

後援／厚生労働省・（社福）全国社会福祉協議会・兵庫県・尼崎市・兵庫県社会福祉協議会
尼崎市社会福祉協議会・尼崎商工会議所

協力／地域子育て支援拠点研修事業＜兵庫開催＞実行委員会
あまがさきキッズサポーターズわいわいステーション

参加者／合計 275 名（男 51 名 女 224 名）

（行政 132、NPO 任意団体 49、他団体・企業 24、その他 70）

開催趣旨

平成 19 年度より、つどいの広場事業、地域子育て支援センター事業を統合し、児童館などのスペースも活用しながら、地域子育て支援拠点事業（ひろば型、センター型、児童館型）が新たに再編されました。そこで、行政とともに地域における子育て支援拠点間のネットワークを図りながら、地域子育て支援拠点の意義と役割を検証します。また、拠点スタッフ一人ひとりが日頃の活動を振り返り、見識を深め、スキルアップに寄与することを目的とします。

プログラム趣旨

兵庫県は、阪神間の都市部から山間部まで子育て環境も大きく異なりますが、安心して子どもを育てられる環境づくりを目指し、地域ごとにさまざまな子育て支援を展開しています。本セミナーでは、本県で展開されている多様な子育て支援のうち、地域子育て支援拠点事業に焦点を当て、その特色や役割を検討します。また、複数の組織や機関が情報を提供し合う・共同して運営するなど、既存のあり方から一段階ステップアップした取り組みや活動について、多様な角度から検討・討論していくことを目指します。

プログラム

開会

主催者挨拶 財団法人こども未来財団 研修事業部 押本篤良さん
開会挨拶 兵庫県 副知事 吉本知之さん
尼崎市 市長 白井 文さん
実行委員長挨拶 あまがさきキッズサポーターズ わいわいステーション代表 濱田英世さん



押本篤良さん



吉本知之さん



白井 文さん



濱田英世さん



プログラム1 基調報告

「地域子育て支援拠点事業の概要と展望」

朝川知昭さん 厚生労働省雇用均等・児童家庭局総務課 少子化対策企画室 室長

たくさんの資料から今の子どもを取り巻く社会の流れや、地域子育て支援拠点の現状について説明していただきました。子育て支援のための制度や事業を整理して示していただいたので、今後の展望も理解することができました。ただ政権が変わり、地域子育て支援拠点事業を含めた国の動向について関心が集まり、期待と不安が入り混じった参加者からの声もありました。



プログラム2 ミニ講演

「ひょうご子ども未来プランをともに」

清原桂子さん 兵庫県理事

少子高齢・人口減少社会が進む中で、少子化対策・子育て支援の取り組みは、まさに待ったなしです。地域団体や NPO、企業、大学、行政などが一緒に力をあわせて、子どもたちを大切に生み、育てていく社会をつくっていきませんか。



兵庫県理事であり少子対策本部事務局長である立場から、県内の調査から見たさまざまな現状と、直面する課題を報告されました。

少子対策・子育て支援と家族への支援として掲げられた「ひょうご子ども未来プラン」の10のアクションの中から、主に男女共同参画やワークライフバランスについての取り組み、また産学官、企業・職域団体、県・市町との“協働”の意義、必要性、展開を紹介されました。

子育ての変化を歴史的な背景から学び、地域ぐるみの子育ての根底には、人と人との信頼された関係が不可欠であるというお話と、何より“今”を楽しむことから始めましょうと勇気づけられる講演となりました。

プログラム3 基調講演

「協働によって広がる子育てひろばの可能性」

伊藤 篤さん 神戸大学大学院教授

神戸市との連携による子育て支援施設「のびやかスペースあーち」の運営や地域との連携を通して、子育て支援拠点の可能性を探り、午後の分科会へのヒントとします。



地域子育て支援拠点事業の3つの型の特徴が丁寧に解説され、さらに伊藤さんが長年かかわってこられた大学サテライトとしての拠点運営から見てきた「地域諸リソース間の協働・連携のあり方」や「これからのひろば型拠点の方向性」について具体的な提案がありました。

兵庫開催のサブテーマに挙げられている「協働」ということを、いろいろな意味から考えさせられ、これから発展的に支援の輪を広げる活動をしていくためのヒントをたくさんいただきました。



プログラム4 分科会

分科会 1～4 は、テーマに基づいた話題提供を 20 分程度行い、これを受ける形でコーディネーターやファシリテーターが進行をします。パネル形式やワークショップ形式などそれぞれの特徴ごとに手法を変えた分科会の進行を計画しました。

■ ■ ■ 第1分科会

「子育て支援拠点に関わって大学がしていること・できること」

県内にある大学が子育て支援拠点に関わっていることに着目。大学がとらえる子育て支援への多様なアプローチから、地域資源としての大学が果たす子育て支援のあり方を学びます。

【コーディネーター】	坂本純子さん	NPO 法人新座子育てネットワーク代表理事
【パネリスト】	伊藤 篤さん	神戸大学大学院教授
	藤田継道さん	関西国際大学教授
	倉石哲也さん	武庫川女子大学准教授
	橋本真紀さん	関西学院大学専任講師



伊藤 篤さん



藤田継道さん



倉石哲也さん



橋本真紀さん

県内 4 つの大学の教員の方々にパネリストをお願いし、各大学による子育て支援拠点の運営について紹介していただきました。

すでに神戸市との連携による拠点運営が 4 年を超える伊藤さんからは、支援の組み合わせ・支援の対象を意識した取り組みの紹介と、大学が提供するサービスのモデル提示機能と持続可能性に関する課題の提起がありました。

2009 年 5 月に「子育て支援センター」を開設された藤田さんからは、同センターの取り組みを丁寧に紹介されると同時に、取り組みの柱として位置づけられている「発達障害にかかわる相談・療育・支援者養成など」の構想が語られました。2009 年後期から拠点運営を始めている倉石さんからは、開設時に、近隣地域ですでに同様の事業を展開している団体や人々との入念な調整が必要であった経験から、「大学が育児サークル・ボランティア・行政などと対等な形で、一つのチームとして共に地域の子育て支援を充実させていく必要がある」とのお話がありました。

2010年度から拠点運営を開始する予定の橋本さんからは、「すでに大学にある“子どもセンター”を核に教育・心理・福祉の観点から地域貢献を展開するとともに学生のキャリア形成の場としても拠点を位置づけていく」というお話でした。

「行政から大学への働きかけについてや地域住民活動との調整について」という質問に、倉石さんからは、「地域住民活動との格差への危惧、その対応としての補助金額を含めた情報開示と準備段階からの関係づくりの重要性」、橋本さんからは、「長期的視点での関係作りの必要性」が語られました。

伊藤さんより、「大学が拠点となりうるか」という課題の具体的対応として、「意図的ではないが拠点を学外に設置したこと、建物等が古いものであったこと等が逆に功を奏した」と報告され、「関西国際大学がNPO活動を行う人材を職員として雇用しているのも効果的であろう」というお話もいただきました。今後、子育て支援に関して大学は、どんどん開かれていくだろうということが見えてきた分科会でした。



坂本純子さん



■ ■ ■ 第2分科会

「地域資源の発掘と子育て支援拠点の充実」

～企業や地元商店街・学校などとの連携事例から学ぶ～

企業が開催しているひろばの事例や、地元商店街・学校などの地域資源と連携した拠点の取り組みから、今後の子育て支援のあり方を考えます。

- 【コーディネーター】 濱田英世さん あまがさきキッズサポーターズわいわいステーション代表
【事例報告者】 榮川正治さん (株) 阪急阪神百貨店 西宮阪急子ども服販売部
森井昌子さん あまがさきキッズサポーターズのびのびステーション代表
古保初代さん 豊岡市竹野子育てセンター子育て指導員



左から
榮川正治さん
森井昌子さん
古保初代さん



濱田英世さん

最初に各団体から、日頃の活動内容や主に取り組んでいることについての報告をしてもらいました。

企業から「到達地点は同じかもしれないが、我々は意図的に子育て支援をしようと考えて行っているわけではない」という意見が注目を浴びました。しかし、地域の力と知恵を十分に取り入れた絵本室や質感を重視した玩具を取り揃え、「子どもの笑顔のために」をキャッチフレーズにしているということが、まさしく子育て支援を担っていることになっているということを新たに確認しました。

反対に地元商店街と共に地域活性化を図りながら、ひろばをしている例からは、まさしく地域にある資源を有効に使い、これからの仕掛けが広がっていく段階にあるということに期待が集まりました。

地域資源として中学校に親子で出向き、子どもとのふれあいから最後は性教育にまで話を広げ、中学生にもしっかり子育てについての投げかけをしているという竹野子育てセンターの事例からは、今後ひろばから中高生へと縦のつながりの発想と発展を工夫していくことができるということ学びました。



会場からの質問を通して、シニア世代との協力・協働も必要不可欠であるという共通理解を持ちました。各地域の特色を生かし、そこにある資源（人・場所・道具など）をいかに取り入れ、連携させていくかによって、今後の活動に膨らみが出てくるだろうということや、これからは企業と子育て支援拠点も相互に情報を交換し合い、情報発信の場として協働していければ、目的や利用者は違ってもそれぞれ一つの拠点となっていくという展望が語られました。

■ ■ ■ 第3分科会

「課題をきっかけにつなごう」

～事前アンケート調査結果によるワークショップ～

利用者と向き合う中で出てくる課題を、県下の地域子育て支援拠点 75 か所を対象に事前アンケートを実施し、その結果をもとにワークショップ形式で拠点事業の現状と課題について話し合います。

【コーディネーター】 徳谷章子さん NPO 法人ハートフレンド代表

【ファシリテーター】 青山純代さん 親と子のほっとスペース サンタッタひろば

井関聡美さん NPO 法人子育て支援センター園田北 きらきら

若山真実さん NPO 法人子育て支援センター園田北 きらきら



徳谷章子さん



青山純代さん



井関聡美さん 若山真実さん

第3分科会では、4つのグループにわかれて、ワークショップ形式で話し合いを行いました。ワークショップでは、事前アンケートの項目2に焦点を絞り、ひろばのスタッフとして困っていることや悩んでいることなどをメモ用紙に一つずつ書き込み、模造紙に貼っていく作業を通して、それぞれの課題の関連性や解決の糸口をさぐっていきました。

事前アンケートから浮かび上がった課題と同様のものが多く挙がり、どこも同じ悩みを抱えながら日々努力している様子が伺えました。4グループとも活発な意見や情報交換が行われて、違った角度から課題を見ることができ、解決のヒントをもらうことができました。また、ワークショップを通して、ひろば同士の新しいつながりへの期待を持つこともできました。

分科会資料として、ワークショップ進行表と事前アンケート結果を用意し、事前アンケートの項目3で挙がった「おすすめアイテム」のいくつかを展示して、参考にいただきました。

事前アンケート結果

(1) 実施時期 2009年8月

(2) アンケート送付先：兵庫県下の地域子育て支援拠点75カ所 アンケート回収数：25カ所（33%）

(3) アンケート項目

【項目1：ひろばをやっている良かったと思うこと】

母親に寄り添いながら話を聞く中で、子育てに関する悩みや不安を軽減してあげることができ、母親が笑顔で帰るときはとてうれしく感じます。また、ひろばは仲間と出会える場になっており、母親同士の交流が深まり、つながりができたことで互いに育ちあい、いきいきとした姿を見ることができます。回数が増えてくると、受け身ではなく親自身が主体的に関わっていき親子の成長が伺えます。ひろばは親子にとってもスタッフにとってもほっとできる空間になっており、親子がきちんと向き合える時間であり、のびのびと遊んで楽しんで参加できています。さらに、高校生や大学生、地域の方々がボランティアとして参加してくれており、互いに支えあうとともに世代間交流の一助にもなっています。

【項目2：ひろばをやっている困っていることや悩んでいること、または課題】

けがや事故などへの安全管理や衛生管理では慎重な対応が必要だと感じます。また、参加者の人数の予測は難しく、場所が狭いと混雑し、十分な活動ができなくなることがあります。母親たちは仲良くなると自分たちの話に夢中になり、子どもに目がいかなくなるが多々あります。さらに慣れるとルーズになり使用ルールを守れない人たちが出てきます。母親の価値観・育児感もさまざまで、対応の難しさを感じます。スタッフの意見交換・ミーティング時間の確保・スキルアップが必要とされます。さまざまな親子が訪れるので活動の内容・プログラムを考えるのが大変です。

【項目3：ひろばで工夫していることや独自のおすすめアイテム】

手作りおもちゃ・絵本コーナーを設けたり、季節を感じる壁面飾りを工夫しています。来場時には手洗いを奨励し、毎日のおもちゃの消毒など衛生面への配慮をし、安心してのびのび遊べる場作りを心がけています。プログラムの工夫では季節感のある遊びやイベントを考え、異世代交流もできるようにしています。また、親が子育てや健康、食育など幅広く学習できるように講師を招いての講演会や相談、実習をしています。スタッフは常に穏やかな気持ちで接し、温かく迎え入れ、声掛けをすることに気をつけています。また、今後は配慮の必要な母親や子どもへの適切な対応が求められてくるので、スタッフも日々研修を積んでいます。



第4分科会

「兵庫の子育て支援拠点のこれから」

～ひろば型・センター型・児童館の県内活動事例から学ぶ～

兵庫県は日本海から瀬戸内まで、まちの様子も子育て環境も大きく異なっています。各地域のさまざまな特徴をふまえて、子育て支援拠点の意義や役割についての共通認識を図ります。

- | | | |
|------------|---------|------------------------------------|
| 【コーディネーター】 | 奥山千鶴子さん | NPO 法人びーのびーの理事長 |
| 【事例報告者】 | 濱田格子さん | NPO 法人子どものみらい尼崎理事長 |
| | 岡本美紀さん | 多可町子育てふれあいセンター八千代子育てふれあいセンター子育て指導員 |
| | 依藤洋子さん | 加東市社児童館やしろこどものいえ館長 |
| 【コメンテーター】 | 清原桂子さん | 兵庫県理事 |



清原桂子さん 奥山千鶴子さん



濱田格子さん 岡本美紀さん 依藤洋子さん

まず奥山さんが、ご自身が子育て支援活動に関わったきっかけ（阪神淡路大震災と地下鉄サリン事件）や横浜市の子育てをめぐる状況について話され、事例報告者に各市の現状と活動を通じての気づき、今後の抱負を質問されました。

尼崎市（人口約 46 万人）の濱田格子さんからは、自主事業と、委託事業によるつどいのひろば、そして高齢者福祉も含めた市立すこやかプラザの指定管理に関わる中で、「ひろば」は子育ての「自助・共助・公助」がつながる場であり、親・子・支援者・社会のそれぞれの発達をめざす場であるという報告

があり、多可町（人口約2万4千人）の岡本美紀さんからは、幼保一元化施設に併設されたセンターとして、さまざまな事業を実施し、美しい施設と豊かな自然に恵まれ、乳幼児から小中学生、高齢者などいろいろな世代が利用し、交流を深めている様子が伺われました。

加東市（人口約4万人）の依藤洋子さんからは、ひろば事業のほか、親のための学習会や学童クラブなど多彩な児童館事業の内容や、児童館で実際に使われている牛乳パックや折り紙を使った手作りのおもちゃの数々が披露されました。

清原さんからは、各報告者への丁寧なコメントの後、これからは、家単位ではなく地域3世代同居という考え方が必要であり、子育て支援拠点は地域における“もうひとつの家”であると話されました。また、地域の一人ひとりが「親」「教師」に次ぐ“最後のカード”として児童虐待や犯罪などを抑止する力になれると語られ、報告者を含め参加者一同があらためて社会的責任を強く感じました。

プログラム5 全体会

- 【コーディネーター】 安孫子浩子さん NPO 法人 Chacha-House 前代表理事
- 【報告者】 第1分科会 坂本純子さん NPO 法人新座子育てネットワーク代表理事
- 第2分科会 濱田英世さん あまがさきキッズサポーターズわいわいステーション代表
- 第3分科会 徳谷章子さん NPO 法人ハートフレンド代表
- 第4分科会 奥山千鶴子さん NPO 法人びーのびーの理事長

各分科会の報告から、すべての分科会の様子を知ることができました。いくつか共通のキーワードの中から、「地域子育て支援拠点がもう一つの家として、安心して集える“子育てほっとステーション”になれば、そこからつながりも信頼も生まれ、地域の良さも発見できていくのであろう」とまとめられました。安孫子さんからは“乳幼児から青少年までのどこかの時期に関わること”をしていれば、いつか困った時の「最後のカード役」として支援できることもあるはずと、子育てに終わりではなく長い視点から見守り・支援活動を続けていく元氣と活力を会場全体で感じ合いました。



閉会

閉会挨拶 NPO 法人子育てひろば全国連絡協議会 理事長 奥山千鶴子